

★プロローグ★

「ヒーローアカデミーに楓を通わせるって、どういうことなんですか!？」

「それが一番、良いんじゃないかなと思ってね」

シユテルンビルドの要、メダイユ地区にギリシヤの神の名を冠する建物が幾つかある。その一つのアポロンメダイアのアレキサンダー・ロイズの執務室内で、虎徹は上司であるロイズと今、二人きりだ。

そしてロイズの思ってもみない提案に勢い余って机へ両手を着き、前のめりになった。

「どどどど、どうしてですか!？」

「どうしてって、ネクストなんでしょ?おたくの娘さん」

「いや、だからって別にヒーローアカデミーなんて大袈裟過ぎやしませんかね」

「ヒーローは不規則だし、何よりも君の力はもう1分しか保たないし。一緒に住み始めたのは悪いことじゃないがこの先、どうなるかも分からない訳だ。まだ娘さんは小さくて力も制御出来ないしと聞いたしね。だったらヒーローになる・ならないの有無はさておき、コントロールは出来るようにだけしておいた方が良くないのかな。そうそう、校長のティモ・マツシーニ氏には僕から話はつけてある、すぐに入学出来るよ。ああ、感謝なんてしてくれなくて結構、御礼は成績で返してくれたまえ」

ロイズは虎徹が入室してから一度も眼を合わせず、伸びた爪をパチンパチンと切っている。

流れるような明瞭な台詞は反論を挟むような隙を一切、与えない。

「お気持ちには有り難いんですけど、そこまでして頂くのもちよつと…」

「嫌なら辞めて構わないんだよ?」

「……」

最初から勝ち目も無い話だったが、うぐ、と虎徹は奥歯を噛み締めた。

そもそもヒーローになるならなんて…というくだりからしてメチャクチャ白々しい。ヒーロー事業部統括部長のオコトバである、胡散臭いなんてものじゃない。きつと恐らく多分、もしかしなくても自分が1分しか保たない能力なので、それも消えたら華々しく娘を投入させたいという作意があり感じられる。

しかし、ヒーローアカデミーは誰にでも門を叩けることにはなっているが実際には中々、入学出来ない難関校だ。要は自分さえ引退しなければ娘は力について学べるのだし。

(何よりも同じ力を持つのが自分だけじゃないって、分かれば寂しくないよな…)

自分の子供の頃は蔑まれ忌み嫌われていた能力でも、今は変わりつつあるから。

「分りました!! ヒーローアカデミーへの入学、宜しくお願いします!」

虎徹はトレードマークのハンチング帽を取ると、深々と頭を下げた。

「うん、じゃあ新しい家を決めないといけないね」

「は？」

「ブロンズに在る君のアパートからじゃ遠いじゃない。言つたでしよ、不規則だからまず学校。次は住む家。時間の規則的な保護者が必要」

話が全く見えてこない虎徹を憐れむように、ロイズはようやく視線を上げた。

「ヒーロー管理官のユリー・ペトロフ氏に頼むと良い。打診はしておいたから」

「そんな!! やつと楓と住めてるんです、それを——」

「朝も昼も夜もない仕事だし、それを言うならオデュッセウスコミュニケーションのドラゴンキッド君の例もあるだろう? 理解と時間の融通の利くしつかりとした人物に一年位、お願いした方が後々、良いと思うがね。君じゃ、時間の都合つかないことが多いし」

「ユリーさんは良い人ですが、他人に娘を預ける訳には」
「嫌なら、辞めて良いんだよ?」

最近、ようやく。パ格好良い!と言われるようになってきたのにあんまりである。よよ、と泣き崩れる虎徹に構わずロイズは淡々と書類に捺印すると、虎徹に手渡しした。

「ハイ、これ。ペトロフ氏に渡す書類。便宜は諮^{はか}つておいたから後は自分でやって頂戴」

もう下がつていいよ。しつしと手で追い払われて虎徹は本格的に泣きたくなつた。

(ちよつと前までバニーと首位でコンビだった頃じゃ、手取り足取り腰取りつて待遇が……)

待遇そのものよりも、この心のビュウビュウ吹き荒ぶような寒さはなんだ。

二軍落ちしてからというものの、普通は会社がやってくれるようなことでも今や全からく自力更正である。虎徹はめそめそしながら、鉛でも詰められたかのような重たい足取りで帰路へと着いたのだった――。

バーナビーも通つていたヒーローアカデミーへ通うことになつた楓はむしろ嬉しそうで、父親である虎徹の気持ちを複雑にさせた。

週末は帰つてきて良いという条件だったが、大半を他人の家へ預けなければならぬのだ。虎徹は、どうしても切り

出せないまま既に一日が過ぎていた。ポケットへ突っ込んだ上司からの書類も管理官へ渡していない。

いつそ訳を話して母親の元へ預け直すべきなのか逡巡^{しゅんじゆん}していると、逆に管理官から連絡が来た。

『顔合わせは早い方が良いでしょう』と――。

伶俐^{れいり}そのものな彼の横顔が頭を寄切る。そうこう迷つている内に娘を連れていくのが大前提の彼との待ち合わせ時間になつた。虎徹は未だ何も知らない娘を横目に見ることしか出来ない。ここまで来たら車内で話すしかない。どこへ行くの?と不思議そうな娘を促して乗車させる。

「なあ、楓。もしも、だけどパパと一緒に住めなくなつたらどうする?その、ヒーローアカデミーは遠いし寮つてんじやないけど他の人と住むことになつたら嫌、だよな」

「うーん、そんなに遠いの?お父さんヒーローやつてるから送り迎えなんて無理だしね。住むのは相手によるかな。バーナビーだったら大歓迎だけど!!」

「そっか」

ここでまたしてもバーナビーである。最早、娘の憧れの強さはガチだと思つた。

そしてああいう表面的な気障さが全くない管理官と年頃で気難しい娘の相性は、絶望的に思えてならなくなってきた。

「：最初の一年だけな、パパも規則だしオデュッセウスコミュニケーションのドラゴンキッドみたい、後見人の人がお前の側に居た方が良いんじゃないかっていう話が出てるんだ」

「何ソレ!？」

「う、うん。いきなりで驚くよな、楓が嫌なら勿論この話はないこと」

「お父さんは：私が邪魔になっちゃったの？」

虎徹は車にブレーキをかけ、急停車した。路肩へ乗り上げ、後続の車から大音量のクラクションを鳴らされたが耳には入っていない、お構いなしだ。

「そんな訳ないだろう!! 楓はパパの自慢の娘だ、一緒に住みたいよ。でも、朝も昼も夜も一緒にいてやれない。ブロンズステージは安全じゃない、だから」

「もういい私が邪魔なんですよ!! お父さんなんか大っ嫌い!! 寮だろうとちゃんと私は一人でやりませう」

楓は大きな瞳に涙を溜めると、唇を噛んで俯いた。紅葉のようなちいさな手は服の裾を握りしめてふるえている。

「……………」

「……………」
今更、やっぱコレなかったことにして〜とも言えない。会社の決定事項を普通のサラリーマンの自分が覆すことも相当難しい。しかし、幼い娘にそれを強要するのはとても理不尽だ。

確か夫婦の離婚原因の二位は『会話が無い』だった(喫茶店に置かれていた週刊誌のブライダル特集調べ)

このまま会話が無くなるのはマジヤバイとは分かっているが、下手に楓の傷ついている心を刺激すれば暴走しかねない。不安定な能力では大惨事を引き起こすことにも成り得る。

結果、下手なフォローも思いつかないまま、司法局までの道程を重苦しい沈黙が支配した。

ツンとしている楓に内心、半泣きになりながら司法局の入り口でパスを受け取り、管理官室を訪ねると、果たして彼はそこにいた。

虎徹へ盛大に舌を突き出した楓は、虎徹の握手に応じようと歩いてきたユーリとぶつかる。

(……!?)

触れた途端、ぶわつと鮮烈な蒼い炎のようなものが視えた。

驚き父親に縋るとそれは消えた。

(この人、ネクストだ…!!)

「ほら楓、挨拶しなさい。ヒーロー管理官で、これからお前の後見人になるかもしれないユーリ・ペトロフさんだ。パパがいつも仕事でお世話になっている」

(お父さん、この人がネクストだって知ってるのかな) ギョツとして見上げるが父親は知っているのかいないのか、普通にしている。

「それで、ですね。ユーリさんへのお願いってのがウチの娘のことで。他のネクストを触ったら、その力をコピーで

きるっていう珍しい能力を持っているんですが、目覚めたのがここ一年位なんです。まだ、コントロールが上手く出来なくてデスネ。それでロイズさんのススメもあってその、ヒーローアカデミーへ通わせたらってことになって。

いや、俺としては娘をヒーローにする気はないんすけど！ ええと、後見人をお願い出来ないかという相談です」

「私でよければ。未成年者を正しく導くのも司法局の仕事ですし、何よりもあの悪夢のようなマーベリック事件を解決した立派なヒーローの娘さんです。ヒーロー管理官の私が協力するのは当たり前でしょう」

てつきり皮肉気に『そこまでする必要があるとは思えません』と予想していた虎徹は拍子抜けした。

「でも、いきなり後見人だなんてユーリさんにも御家族が」 「あいにく、母だけです。それにその母も今は養護ホームで療養中です、実質独り暮らしなので問題はありませぬ」

まるで他人事のように語る彼からは感情じみたものは欠片も感じられない。例え、それが現在進行形なのだとしてもその穏やかな口振りからは微塵も内面を窺わせるも

のがない。

「はあ…」

ユーリに断られさえたのなら、ロイズからの突飛な命令もあわよくば無効になると思っていたのに。これはかなりノリノリじゃないだろうか。阻止したいのに、すぐ様子立てが思い浮かばない。

「すみませんが、ちよつとだけ娘さんと二人きりにさせて頂けませんか？年頃の娘さんでは父親と同席では話せないこともあるでしょう、本当に私が後見人で良いのか了承を取りたい」

紳士的な提案に虎徹は歓喜した。

「気を遣わせてしまつて、すみません！ なあ、楓。どうするのかはお前が決めていいんだからな？ パパといったいとか、頼りになるお父さんといいたいとか、それからやっぱり親子水入らずで暮らしたいとかつ」

「あーもう、いいから出ていって!!」

ハイテンションな父親に楓のイライラは爆発する。虎徹は部屋から追い出された。

虎徹がいなくなると楓は一步、歩み出す。

「…あなた、ネクスト？」

射抜くような瞳は正邪を見分けるアルテミスのような。ユーリは舞台役者のように美しく礼をした。

(報告には上がっていたが、稀有な能力だ)

「楓さん、貴女は私をネクストだと周りに云いますか？」

「…もしかして、内緒にしてるんですか？」

「ええ、ずつとね。私も貴女と同じように父がネクストだった。しかし母は普通の人で——。色々と上手くいかなかったんですよ。だからかでしょうか、私はネクストという能力をずつと隠して生きてきました」

仮面で素顔を覆えば結構な割合で公にテレビにまで出ているが、ユーリは俯きがちにさも悲しそうに告げた。能面は上を向けば喜びを。俯けば悲しみを顕すように、感情など見せない表情も哀しんでいるようにしか見えない。

「言い…、ません。言ったらユーリさんは困るんですよね？」

賢い子だ。

「私はヒーロー管理官です。ネクスト能力者と判っては立場は難しくなります」

全ての偏見は消えないように。人は己と違うものを忌み嫌う。

「…言いません」

楓はしつかりと頷くと、ユーリの真ん前へ来て、手を掴んだ。小指を差し出して、驚く青年の指へと絡める。

「指切りげんまん、嘘ついたら針飲ます。指、切った」
小指を離すと楓は真剣な面もちで、言いませんと繰り返し、す。

「私の住んでいた所だと、約束する時はこうするんです」
だから安心して下さいね？」

という楓にユーリはどう返していいものやら言葉が咄嗟に出てこない。

（子供とは、こんなに簡単に素直なものなのか…いや、私の子供時代を比べても仕方ないが）

「秘密を…知ってなお、言わないと云ってくれた貴女へ私
は出来る限りの信愛を約束しますよ」

「しん…あい？」

まだ十一歳の楓にはピンと来ない単語だったらしく小首を捻った。

ユーリは目許めもとをやわらげる。

「大切にする、ということですよ」

艶やかな声が無機質な部屋でいやに響いた。まるで教会か何かで宣誓されているような厳かさだった。

楓はまじまじと初めてユーリを見上げた。色素は全体的に薄く沈着冷静を絵に描いたような印象だ。そして、美丈夫である。楓はいつか憧れているバーナビに、そんな風に言つて貰えたらと空想をしたことはあった。

だが、こうやって綺麗な男性にいざ云われて仕舞うと、どうしていいのかわからなくなった。

「よ……、よ…宜しくお願いします」

どもりながら楓は頬を染めて頭を下げた。

犯罪心理学は最先端をいつているとも言えるが、思春期まった中の少女の心理となるとユーリは疎い。何故、楓がいきなりおとなしくなったのかは理解が出来なかつたが交渉は成立したことを察し、外でソワソワと扉前をうろつく虎徹へ「入って下さい」と穏やかな声で呼びかけた。

そうして——ユーリと楓の生活が始まった。

実家から父親のアパートへと引越した楓の荷物はずもとそんなにも多くもない。クローゼットなども使っていないと言われており、いたれり尽くせりの待遇である。

楓は引越し前日から入念に旅行鞆へ荷物を綺麗に詰め、不安とも期待ともつかない気持ちごとヒーロー管理官の住まう家へ虎徹に送ってもらった。

「おつきい!!」

公務員でも上級職の司法局員であり、そのエリートと説明されればきつと裕福なんだろうとは思っていたが本当に広い。実家の倍以上ある。

（こんな広い所に一人で住むのって寂しくないのかな…）
大人になれば、成長をしたら寂しいという気持ちも大丈夫になるのかな。

虎徹が遅れて大きなトランクスを片手に楓に追いつき、

ユーリの邸宅のチャイムを鳴らす。

ぶびー・ぶぶぶびー。

重低音過ぎるチャイムに親子が驚いていると、お昼間だというのに相変わらず血色の悪いユーリが現れた。唇が紫なのに親子は二度驚き、虎徹に至っては荷物を危うく落としかけた。

むしろ顔色が悪いという表現ではおさまらない、死に神を連想させるには容易なくらい紙のように色が白い。

（どれだけ徹夜したら、こんな顔色になるのか…、もしかしたらあの破壊事件とか今、係争中の損壊裁判とかのせいかな!?）

「おおお、おはようございます!! ユーリさん」

うわあ、いたたまれない。と、虎徹は頭を米搗きバツタのようにぶんぶん下げた。

「おはよう、というには正午を回っていますか…?」

楓は瞬間、バツタを続ける虎徹へ素早く肘鉄を喰らわせオホホホと笑って誤魔化した。

「エエト、こんにちは！ ユーリさん、今日から宜しくお願ひします」

「お待ちしていましたよ。さあ…どうぞ」

鳩尾に肘が綺麗に入ったため、声も出ないまま虎徹は涙目で頷き、親子は案内されるまま玄関に足を踏み入れる。外観も立派だったが中も素人目にも高いものが並んでいる。調度品も高級感たつぷりだ。

「おい、楓、壊さないようにな？ パパのお給料だとマジ払うのキツそうだ」

「なに今更言ってるのよ！ 壊し屋なのはお父さんの方でしょ!? 力も安定してないんだもん、どうなるかなんて分かんない」

「壊し屋はあくまでも正義のためであつてだな」

ぎやあぎやあ賑やかな二人を応接間へ通すとユーリはお茶を用意しにキッチンへ行つた。

どうぞと言われて腰掛けたソファは革張りだ。親子は汚してはいけないと途端に寡黙になる。

「おや？ どうしたんですか、二人とも」

さつきまでうるさかったのが嘘のようだ。

「これから、楓さんが住むことになる部屋を案内します。一緒についてきて下さい」

「はー」

借りてきた猫のようにおとなしい二人に、ユーリは淀み無く説明してゆく。

「空き部屋も幾つかあるので、その内の一室を楓さんの私室にと。気に入って頂ければ良いのですが」

全く予想もつかなくて二人はゴクリと息を呑んだ。虎徹は拷問部屋のイメージが何故か脳内を駆け巡つた。

どうぞ、と扉を開けられ恐る恐る覗くと、やわらかなサーモンピンクが基調の部屋が目飛び込んできた。見渡せば、いかにも楓くらいの年頃の少女が好きそうな内装だった。天蓋付のレースのベッドは、ドレープたつぷりに波打っている。

「この部屋は陽当たりも良いですしね、ただ古かったのでリフォームしました。どうぞでしょうか」

「こ、ここに住んでも良いんですか？」

「ええ。それに私が住むにはちよつと似合わないかと」

ファンシーでリリカルでメルヘン過ぎやしないだろう

うか。とてつもなく、似合わない。母が住んでもおかしいだろう。

しかし、そんな似合う・似合わないという形の問題よりも虎徹は大人の事情が気になった。はしやぐ楓を余所よそにコソリと管理官へ耳打ちをする。

「ユーリさん、リフォーム代金は…」

「気になさらないで下さい。ロイズ氏からも補助は出ていますので」

アポロンメディアのヒーロー事業部統括部長の本気を見せつけられ虎徹は何とも言えない、ナマ暖かい気持ちになった。

「そ、そうスカ」

「ええ」

(というよりも、隠し部屋に気づかれては困るのでね。嚴重に壁の厚い仕様にもした、私の都合もあるんだが)

徹頭徹尾、少女趣味なこの部屋を早速、楓は気に入ったらしく荷物を率先して運ぼうと張り切っている。

「鈴木さん、私が一年間しつかりお預かりしますよ。安心してヒーロー業務に精励されて下さい、勿論、賠償金は

発生しない方向では非」

しつかりと釘を刺された虎徹は神妙な顔つきで頷いた。「まだ子供なので、ご迷惑をかけることもあるかと思いましたが楓を宜しくお願いします」

ユーリが頷くのを見て、虎徹は車に残っていた荷物を部屋へ運び始めた。

荷物は大体片き虎徹はアパートへ帰っていった。

そして気づけば晩ご飯を支度する時間になっていた。

「あの、ユーリさん、私は目玉焼きとかホットケーキなら作れます。それからそれから…」

楓は手伝う気、満々だ。

「貴女は…とてもステキな花嫁になれるでしょうね」

「——!!」

彼なりの褒め言葉らしいが、楓は顔から火が出そうになった。

「そうだ今度、ステップボードを買いに行きましょうか」「ステップボードですか？」

「キッチンには楓さんには大きいので必要でしょう。だが今日は生憎と踏み台になりそうなものは無いのでテーブルでサラダの葉をちぎっててもらえますか」

「はい！」

楓は手を洗ってからサラダボールヘレタスを手で千切りつつ、器用にプレーンオムライスを作る同居人となる彼の背中を見つめた。

(頑張らなくっちゃ)

夕暮れに一心不乱で葉を千切る少女とフライパン片手で料理する青年。広い屋敷は、在りし日の穏やかな時間が流れていた。

「おはようございます」

「おはよう」

パパ、タタと学校へ行く支度をする楓の傍ら、ユーリは朝食を用意している。

(おはよう、か。家でこんな挨拶をするのも『あの日』以来だな——)

トーストに慌ただしく蜂蜜を塗る小さな同居人にオレンジジュースを注ぎながら、ぼんやり考えていた。

「帰りはバスですが、もし遅くなるようならメールして下さい。迎えに行きますから」

「ありがとうございます、多分、大丈夫です」

(時間が規則的って、こんな感じなのね…)

父親は珍しい職業だ。サラリーマンだけどヒーローで、いつも時間なんてあつてないようなものだったし。伯父さんは酒屋さんで朝から晩まで働いている。普通のサラリーマン、と言われても実感は沸かない。帰宅の時間もほぼ一定してるなんて、そんな職業が本当にあるんだろうか。

「ええと、ユーリさんは普段、なにをしていますか」

「…は？」

思わず声に出してしまった。

「え、えと、その、お父さんはヒーローだからジムへ行ったりお仕事したりで不規則なんです。でも、規則的な生活をしてる大人の人っていつもなにしてるのかなって」

「人にもよると思いますよ。趣味があれば趣味に興じるでしょうし、家族がいれば家族と過ごすとしか」

「そ、そそそですよね！ 変なこと聞いてすみません」

「私はそうですね、仕事を持ち帰ることもあるので仕事か
もしれません。法律も頻繁に変更されますから勉強したり」

野生の勘なのか、小さくても女性の勘なのか。何かを感じ
ているのかもしれないとユーリは慎重に答えた。まさか
サラリーマンが珍しいだけだからされた質問とは思って
もない。隠したい秘密を山ほど抱えた大人は大変である。

「家に帰っても勉強するんですか!？」

「ええ。覚えることは多いので」

(嘘!! 大人になれたら勉強しなくても良いと思ってた
のにつ)

衝撃的な事実だった。

『私はそれを知ってとてもガツカリした。しかしそれは
気づかなくてはならないことだった』

確か前、読んだ本にそう書いてあったけれど、こういうこ
とだったのかと楓は思った。

急にシヨンボリしてしまった楓に、ユーリは理由が分か
らずどう声をかけるべきか迷った。

「モモは時間泥棒と戦うんです。私はなにと戦えばいいん

でしょうか」

「敵がいるんですか？」

「どつても強いです。灰色の男たちです」

児童文学書にも疎いユーリは、戦隊ものでも好きなんだ
ろうかと思った。

「楓さんが戦うのなら、私は味方しますよ」

大真面目にユーリは力説した。

「…ユーリさんは戦えますか？ あの男たちは本当に強
いんです」

アニメなのかドラマなのか不明だが、根っからの凝り性
のユーリは灰色の男たちの正体をググリたくなった。

「あ！ もう時間ですね、お血洗います」

「私がやっておくので良いですよ、それより忘れ物はない
ですか」

「バッグもあるし、大丈夫です」

うっかり話にのめり込んだ。時間泥棒は確かにいたよう
だった。出勤がてらに車に少女を同乗させながら、しばら
くモモの話で二人は盛り上がった。聞けば聞くほどメルヘ
ンで辛辣な内容だ。クレバーである。

虎徹は見抜けていないままだが、激しく中二病を患っているユーリは楓と短期間で非常に仲良くなった。相性などモロに心配損である。

それからずっとモモの話で盛り上がりながら、有能な若き管理官は殊更、業務に集中して残業をしなくなった。早く帰宅してモモの話をしたいからだ。

（――リア充。というのは、こういうことなんだろうか）
知ってるだけで、ついで使うことのなかった用語にユー

リは思い当たった。そうかこれかと感慨深く頷うなづいた。

スーパーへの買い出し係は自分なので、食材を吟味ぎんみしながら手に取ってゆく。先週、青と緑が基調のステップボードも買った。最近、花を飾りたいと彼女が言うので今週末は花瓶をイケアで探す予定である。ちなみに生まれて一度もイケアへ行ったことは無いが、彼女が楽しみにしているだ、水を差すのも大人げない。

と、既に主導権を楓に握られていることにユーリは気付きもしなかった。むしろ幸福そうでさえある。今日も今日とて平和にスーパーへ行き、帰宅した。まだ火を扱わせるには危ないので食事は一緒に作る。

めつきりルナティックの出勤は減った。アニエスがギリギリとハンカチを噛んで視聴率と戦っている頃、シユテルンビルド唯一無二のダークヒーローは同居人の少女とデイズニアアニメを鑑賞していた。今夜は『美女と野獣』である。

リア充は爆発していた。